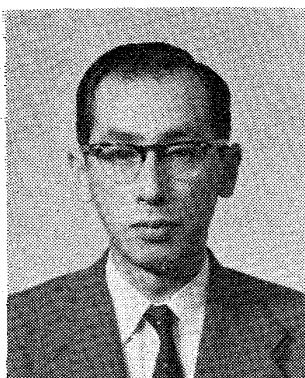


## 随 想



### 企業間競争と共同研究

安原 武彦\*

戦後わが国の鉄鋼業が質量両面において驚異的な発展を遂げ、日本経済発展の原動力となつてきたことは云うまでもないことでありますが、鉄鋼業が大方の予想をこえた急発展をとげたうらには、業界内部にみなぎる激しい企業間の競争意欲が、その推進力として働いていたことを見逃すわけにはゆきません。過去幾度か鉄鋼業の過剰投資、或いは二重投資が世の識者から指

摘され、厳しい批判の対象となつてまいりましたが、結果的にみれば、当時無謀とも思われた設備投資の強行が、今日の経済成長の基礎をつくりあげたとも考えられます。しかし反面、最近における設備投資の行過ぎは、あきらかに企業間の過当競争の結果とみられ、それが業界の命取りになりかねまじき深刻な事態を招きつつあるのも否定しえない事実であります。物事にはすべて良い面と悪い面がありますが、業界内における苛烈な競争意欲の良い面が高度成長への推進力となつて働き、悪い面が業界の秩序混乱の要因となつて働いてきたものと考えます。

多くの人達は、欧米諸国の業界の指導者達が、国内における過当競争を回避し、一糸乱れない協調精神を発揮していることを指摘し、日本の経営者の無自覚を慨嘆しておられますが、その中には、欧米諸国の鉄鋼業を取りまく環境と、わが国のそれとの根本的な差異を無視した議論もあるように思われます。高い金利のかかっている日本の新しい設備と、大部分を自己資金によつて賄った欧米の設備では、生産調節の難易に大きな差異があるのは云うまでもありません。労働条件、国民性等においても日本と欧米諸国の間に大きな違いがあります。それはさておき、何よりも基本的な相違は、欧米諸国の鉄鋼業が既に育ち盛りの時代を過ぎ、安定期に入つているのに対し、わが国の鉄鋼業が今尚成長期にあることにあると思います。欧米諸国の企業といえども、勿論企業の発展成長を望まないわけはありませんが、それに優先して考えられるのは業界秩序の維持であります。わが国の場合は企業成長の意欲とその必要性が強く、秩序の維持が二義的にならざるを得ない状態におかれていたように思われます。

一方日本の鉄鋼業は今尚伸び盛りの時期にあるとは云え、欧米の実例をみてもいづれは成長力において曲り角にたつ時期がくることは避け得ないことと思います。その時期を予測することはなかなか困難ですが、少くとも近い将来成長の速度が鈍り勝ちになることは覚悟しておかねばなりません。その意味で、鉄鋼業界としては、今回の試練を契機として、今後の業界のあり方について深く反省し、来るべき将来に対する備えを固めるべき時期がきているように思われます。

技術、研究面においても、これと似たようなことが云えそうに思います。わが国の鉄鋼業が、技術面においても世界一流の水準に達していることは、大いに自負して然るべきことでありますが、その多くが、自ら種をまいて営々と育てたものではなく、手取り早く外国より苗を買つて育てたものか、或いは極端な場合は、外国に育つた樹をそつくり植えかえたものであることも認めざるを得ません。それ事体はしかし決して悪いことではなく、むしろそれなくしては、鉄鋼業が短期間にこのような成育発展を遂げることは不可能であつたに違いありません。私の学生時代、先輩から「お前はもう子供ではないのだから

\* 本会理事、通商産業省重工業局製鉄課長。

ら、人から教わるだけでなく、もつと自分で考えることに努めなければいけない」と説教されたことを記憶しています。日本の鉄鋼業も、そろそろ外国からの技術導入に憂身をやつさないで、自ら考え、新しい技術を生み出してゆくことに一層努力すべき年頃になつてゐるのではないのでしょうか。

ところで、鉄鋼業界内における競争意識は販売や投資の面に止まらず、研究の分野においても一層はげしいように思われます。大会社が競つて中央研究所を設立し、本来利害の衝突しないと思われる基礎研究の分野においても、お互に張合つておられるやに見受けられるのは、第三者にとつては何とも理解に苦しむところであらうと思います。しかし先程も述べたように、競争を通じて鍛えられ、成長してきた日本の企業が、研究部門においても激しい競争を行うことは、その是非は別として、一つの必然性をもつていたようにも思われます。

しかし、研究分野における過当競争が、大きな無駄を伴うことは、経済分野のそれと同様明白な事実です。しかも基礎的な研究分野においては、経済分野におけるような利害の交錯も少く、業界内における協調も、公販制度や設備の自主調整より遙かに容易で、かつ効果が大きいものと思います。その意味で、今回日本鉄鋼協会が飛躍的に拡充強化され学界ならびに業界の共同研究を促進する素地が固められたことは、誠に意義深きことと信じます。昨年度末鉄鋼八社によるクリープ試験研究組合が結成され、クリープ試験に関する共同研究体制が確立されたこと、又最近鉄鋼技術共同研究会にラテライト研究部会が新設されることとなり、長年懸案となつてゐたラテライト鉍精錬に関する共同研究の一步を踏みだした事等は、今後のこの種基礎的分野における共同研究推進のためにも、その草分けとして高く評価されるべきものと考えます。

「競争のないところに進歩はない。」とは古来云い古され、又いつまでも変わらない真理だと思いますが、競争に伴う無駄を少しでも省き、かつ国内間の競争より対外的競争に重点をおくよう、共同研究が今後一層強化推進されることを心から希念する次第です。